時評

短歌のオノマトペ

小林賢太

「短歌往来」二〇二四年一月号掲載の勝又浩「短歌とオノマトペ」がとても勉強になった。興味深かったのは、「これらは必ずしもオノマトペとは言えないかもしれないが」と断りを入れつつも紹介された宮沢賢治の次の作品である。

・ナリトナリアナロ御堂のうすあかり毘沙門像に味噌たてまつる
・アナロナビクナビ踏まるゝ天の邪鬼四方につゝどり鳴きどよむなり

賢治全集では詩の未定稿として扱われているが、吉本隆明は短歌として読み、カタカナ部分は意図的な「音喩」だと述べているとのこと(『ことばの力　うたの心』幻戯書房)。そして勝又は、「音喩とは、わらべ歌などに見られるような、意味以前の、音そのものを楽しむための表現だと言ってよいであろう」と評する。

音や韻律の楽しさは、短歌のオノマトペには欠かせない要素だ。「短歌往来」同号にも次のような愉快な例があった。

・顔見世や團十郎仰ぐ江戸びとのまなこしびるるるるるるるる

都築直子「顔見世小唄」

「しびるる」から溢れ出たような「る」音の連続が、湧き上がる高揚感をうまく例えている。都築が「晴れの歌　愛誦歌」として挙げていた次の歌も、オノマトペが特徴的である。

・悦楽のざつざ・ざざんざ金色(こんじき)の霰身を打つざつざ・ざんざ

岡部桂一郎『鳴滝』

「ざ」音の反復が心地よく、聴覚にうったえかけてくる。

このようにオノマトペがユニークな歌は印象的だが、次の一首もそれに該当するだろう。

・カーテンのレースは冷えて弟がはぷすぶるぐ、とくしやみする秋

石川美南『砂の降る教室』

くしゃみのオノマトペといえば、某大魔王の名前にも冠される「はくしょん」などが主流。だが右の歌では、かつてヨーロッパに君臨した名門王家の名が用いられる。しかも意外に違和感はなく、妙に納得してしまう。半濁音と濁音がもたらすリズムやひらがな表記のおかげだろう。そして、くしゃみという何の変哲もない生理現象が発する音を、華麗な王朝名で表現したことで、日常に僅かにひびが入り、歴史の空間がほんの一瞬姿を見せる。「カーテンのレース」というアイテムもそれを後押ししているだろう。「、」はくしゃみの後の瞬間的な静けさ、転じてくしゃみの勢いの強さを表し得るが、ハプスブルク帝国の終焉が歴史に一つの節目をもたらしたことにも繋がるかもしれない。

なお、ミュージカル等でも有名なハプスブルク家の皇后エリザベートが暗殺されたのは一八九八年九月、その夫フランツ・ヨーゼフ一世が没したのは一九一六年十一月、その跡は甥孫のカール一世が継ぐも、わずか二年で帝国は崩壊、彼が「国事不関与」の声明文に署名させられ、ハプスブルク王朝が事実上消滅したのは一九一八年十一月であった。いずれも日本の暦に当てはめれば秋になるが、これは深読みが過ぎるだろうか。